

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

永観二年甲申八月二十八日、位につか<sup>①</sup>せ給ふ、御年十七。寛和二年丙戌六月二十二日の夜、あさましく候ひしことは、人にも知らせ給はで、みそかに花山寺に<sup>A</sup>おはしまして、御出家入道せさせ給へりしこそ、御年十九。世を保たせ給ふこと二年。その後二十二年おはしまし<sup>②</sup>き。

あはれなることは、下りおはしまし<sup>③</sup>ける夜は、藤壺の上の御局の小戸より出でさせ給ひけるに、有明の月のいみじく明かかりければ、「願証にこそありけれ。いかがすべからむ<sup>④</sup>。」と仰せられけるを、「さりとて、とまらせ<sup>B</sup>給ふべきやう。侍らず。神璽・宝剣わたり給ひ<sup>⑤</sup>ぬるには。」と、粟田殿のさわがし<sup>D</sup>申し給ひけるは、まだ帝出でさせおはしまさざりけるさきに、手づからとりて、春宮の御方にわたし奉り給ひてければ、帰り入らせ給はむことは、あるまじくおぼして、しか申させ給ひけるとぞ。

さやけき影を、まばゆくおぼしめし<sup>⑦</sup>つるほどに、月の顔に群雲のかかりて、少し暗がりゆきければ、「わが出家は成就する<sup>⑧</sup>なりけり。」と仰せ<sup>⑨</sup>られて、歩み出でさせ給ふほどに、弘徽殿の女御の御

文の、日ごろ破り残して御身も放たず<sup>F</sup>御覧<sup>J</sup>じけるをおぼしめし出でて、「しばし。」とて、取りに入りおはしましけるほどぞかし、粟田殿の、「いかに、かくはおぼしめしならせおはしましぬるぞ。ただ今過ぎば、おのづから障りも出でまうで来なむ。」と、そら泣きし。給ひけるは。

さて、土御門より東さまに率て出だし<sup>H</sup>参らせ給ふに、晴明が家の前をわたらせ給へば、みづからの声にて、手をおびたたしく、はたはたと打ちて、「帝王おりさせ<sup>I</sup>給ふと見ゆるは。天変ありつるが、すでになりにけりと見ゆるかな。参りて奏せむ。車に装束疾うせよ。」といふ声聞かせ給ひ<sup>⑩</sup>けむ、さりともあはれには思し召しけむかし。「かつ、式神一人内裏に<sup>K</sup>まゐれ。」と申しければ、目には見えぬものの、戸を押し開けて、御後をや見参らせけむ、「ただ今、これより過ぎさせおはします<sup>⑪</sup>めり。」といらへけりとかや。その家、土御門町口なれば、御道なりけり。

花山寺におはしまし着きて、御髪下ろさせ給ひて後にぞ、粟田殿は、「まかり出でて、大臣にも、変はら<sup>⑫</sup>ぬ姿、いま一度見え、かくと案内<sup>K</sup>申して、必ず<sup>L</sup>参り侍らむ。」と申し給ひければ、「朕をば、謀るなり<sup>⑬</sup>けり。」とてこそ、泣かせ給ひけれ。あはれに悲しきことなりな。日ごろ、よく、御弟子にて<sup>M</sup>候はむと契りて、すかし申

し給ひけむが恐ろしさよ。東三条殿は、もしさることやし給ふと、あやふさに、さるべくおとなしき人々、なにがしかがしといふいみじき源氏の武者たちをこそ、御送りに添へられたり【けり】。京のほどはかくれて、堤の辺よりぞうち出で参りける。寺などにては、もし、おして人などやなし奉るとて、一尺ばかりの刀どもを抜きかけてぞ守り申し【けり】。

(1) ①⑬の助動詞を、【例】にならつてそれぞれ文法的に説明しなさい。

【例】受身の助動詞「る」の終止形 ⇓ 受身「る」終止形

(2) ……A～Nの敬語は、誰から誰に対する敬意を表しているか。

【人物】の記号を使って、【例】にならつてそれぞれ答えなさい。

【例】花山天皇から藤原道兼に対する敬意 ⇓ a→b

【人物】

a 花山天皇      b 藤原道兼      c 藤原兼家      d 安倍清明

e 作者      f 読者

(3) 「晴明」の発言部分から絶対敬語を一語でぬき出しなさい。

(4) X・Yの【けり】をそれぞれ適切な形に直しなさい。

高校古典

大鏡「花山天皇の出家」(文法)

解答

(1) ① 尊敬「ず」連用形    ② 過去「き」終止形

③ 過去「けり」連体形    ④ 推量「む」連体形

⑤ 完了「ぬ」連体形    ⑥ 打消当然「まじ」連用形

⑦ 完了「つ」連体形    ⑧ 断定「なり」終止形

⑨ 尊敬「らる」連用形    ⑩ 婉曲「けむ」連体形

⑪ 推量「めり」終止形    ⑫ 打消「ず」終止形

⑬ 詠嘆「けり」終止形

(2) A e→a      B b→a      C b→a      D e→a

E e→b      F e→a      G e→b      H e→a

I d→a      J d→a      K b→c      L b→a

M b→a      N c→b

(3) 奏せ

(4) X けれ      Y ける